

TM トピックス：オリンピックと日本テニス

日本人初のオリンピックメダルといえば、1920 年アントワープ大会の男子シングルスで熊谷一弥選手が獲得した銀メダル。熊谷選手は柏尾誠一郎選手と組んだダブルスでも準優勝し、2 つの銀メダルを所有していた。しかし、2020 年 8 月 22 日、熊谷選手の銀メダルが紛失していたことが分かった。日本テニス協会テニスミュージアム委員でもある、小沢剛氏（共同通信編集委員）が配信した記事を、許可を得てここに転載させていただく。



1920 年五輪アントワープ大会で入場する日本選手団（後方の左から熊谷、柏尾）

日本の初メダル行方不明

アントワープ五輪の熊谷獲得から 100 年

保存は複の柏尾の銀か

日本の五輪第 1 号メダル、1920 年 8 月のアントワープ五輪テニス男子シングルスで熊谷一弥が獲得した「銀」が紛失したまま行方不明であることが、(2020 年 8 月) 22 日分かった。23 日はアントワープ大会で熊谷が銀メダルを決めた決勝から 100 年に当たる。

ベルギーで行われたアントワープ五輪で熊谷は、シングルス決勝の翌日のダブルス決勝でも柏尾誠一郎と組んで準優勝。熊谷 2 個、柏尾 1 個の銀メダルを手にした。

そのうちの 1 個を熊谷らから寄贈された秩父宮記念スポーツ博物館が、歴史的メダルとして「日本初のメダル・銀（熊谷一弥・テニス）」と表示してきた。

ところが、将来のテニス博物館構想を持つ日本テニス協会の問い合わせを受け、同博物館が来歴を調べた結果、第 1 号メダルと断定するのは難しく、ダブルスでの銀メダルの可能性が高いと判断。このほど「日本初のメダル・銀（熊谷一弥・柏尾誠一郎 男子テニスダブルス）」と変え、ホームページ上で表示した。

同博物館の調査では、メダルは 66 年に熊谷、柏尾英三郎（誠一郎弟）氏から寄贈された。熊谷宛て受領書には「第 7 回オリンピック大会入賞メダル（銀メダル）のご寄贈」と書いてあるものの、英三郎氏には「熊谷一弥氏をとおして銀メダルの寄贈をいただき」と謝意が記され、熊谷のメダルと明確に言い切れないことが分かった。

さらにメダルの行方が記された 64 年 1 月 5 日付の都内紙が見つかった。それによれば、熊谷の 2 個のメダルは「一つはアントワープから日本に送る途中で紛失、一つは戦後人に貸したきり戻ってこなかった」とあった。柏尾のメダルも一時不明だったが、62 年に亡くなった柏尾の一周忌に大阪の実家で見つかり、熊谷の手に渡った、と記されていた。

当事者や当時の関係者は亡くなったため、断定は困難だが、同博物館は柏尾の実家で見つかったメダルを熊谷、柏尾英三郎氏が寄贈した可能性が高いとみている。

熊谷の子息、一夫氏（92）は日本テニス協会を通して「父は人に貸して返ってこなくなると嘆いていた」と話した。

（共同通信 2020 年 8 月 22 日配信記事＝年齢は送信時点）



テニスミュージアム委員会が所蔵するアントワープ五輪テニス男子シングルスで熊谷一弥が獲得した銀メダルのレプリカ

五輪は三菱からの出張 奇跡的強運、熊谷一弥

直径 6 センチほどの日本初のメダルを巡るミステリー。熊谷一弥の「当時はオリンピックと言っても大騒ぎしなかった」との発言が残り、歴史的に重要との認識が薄かった可能性はある。

福岡県出身の熊谷は 1917 年、三菱合資会社銀行部（現三菱 UFJ 銀行）入社直後にニューヨーク支店に転勤した。日本移民排斥の「黄禍論」対策に、スポーツでの融和を図る財界の求めで慶大時代に米国遠征して人気を集めた熊谷に白羽の矢が立った。19 年には全米 3 位になった。

アントワープ五輪は、派遣元の大日本体育協会（現日本スポーツ協会）が政府から補助金支出を拒まれ、熊谷は三菱から出張の名目で費用を支給された。

第 2 次大戦中はシンガポールに。長女の和子さん（故人）に聞き取りをした日本テニス協会によれば、阿波丸で帰国予定だった。同船は 45 年、捕虜への救援物資を運び安全を保証されたが、シンガポールからの帰路に米潜水艦の攻撃を受け、約 2 千人の乗員と乗客がほぼ全員死亡した。和さんは、テニスの縁で 1 席空いた軍用機に乗れた、と語っている。44 年に帰国との資料もあるが、証言に従えば奇跡的強運の人と言える。

（共同通信 2020 年 8 月 22 日配信記事）

アントワープ五輪 1920 年 8 月 14 日に開会式を行い、29 カ国が参加した。スペイン風邪の流行は終息していなかったが、第 1 次大戦で大被害を受けたベルギーへの贈り物として国際オリンピック委員会 (IOC) が決定。IOC は、新型コロナウイルス感染症が終息しない現状と当時が似ていることを踏まえ、100 年に当たる 14 日、アントワープ大会を団結と復興の象徴と位置付けた。

2 度目の参加だった日本は、スポーツが国民に根付いていないことを理由に政府から派遣費用の補助を得られず、財閥に支援を頼った。テニス男子シングルスは熊谷一弥が強打で勝ち進んだが、疲労や天候の影響から決勝では南アフリカ選手に逆転で敗れた。

(共同通信 2020 年 8 月 22 日配信記事)



1920 年当時、熊谷一弥が使用していたラケット。当時のラケットには革のグリップテープがなく、滑り止めの溝が施されていた